

症例「鼠男」における自我変容としての道徳性

－S.フロイトが論じた二種類の「反動形成」－

後藤 悠帆

1. はじめに

精神分析の創始者、S.フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) は、1923 年の著作『自我とエス』において、心を自我・エス・「超自我 (Über-ich)」という三つの審級からなる構造として把握する第二局所論を提示した。心の「良心」の機能を担う超自我の形成や発達を論じた一連の仕事は、これまでの教育学研究でも「道徳性 (Moralität)」の発達理論として紹介されてきた (大西文行 1992, 下司晶 2016)。両親と、後には同じ社会の成員との「同一化」を介して、子どもが外界の社会規範を内面化する過程として、超自我 (道徳性) の発達を説明するフロイトの立論は、そこだけに着目すれば決して新奇なものとはいえない。こうした理解は特にアンナ・フロイトらの自我心理学派が引き継ぎ、教育にも大きな影響を与えてきたとされる (下司 2016: 56)。

しかし、フロイトは良心 (道徳性) の発達を、決して超自我という概念にのみ託して論じたわけではない。『制止、症状、不安』(1926) の中では、人の道徳的な性格が強化される心的過程を、「強迫神経症 (Zwangsneurose)」の患者に見られる「反動形成 (Reaktionsbildung)」と比較しながら論じている。すなわち、良心の働きが高まる「強迫神経症患者の自我における反動形成」とは、「通常性格形成が極端になったもの」である、と (G.W., 14: 144/全, 19: 42)。

この「反動形成」という心の働きを、たとえば『精神分析用語辞典』(1977) の編者は、「抑圧された欲望にたいする反動として形成された、それとは逆の心理的態度または習性」¹と説明する。自我の防衛機制のうちにそれを数え入れたアンナ・フロイトも、「反動形成」を自我による抑圧されたものとは反対の傾向への性格形成と理解している (1985: 60)。しかし、後に本論で検討するように、フロイト (1915, 1926) 自身の論述によれば、この心の働きは、超自我による自我の支配が強まる心的過程と、欲望に対峙する自我の性格が変容する心的過程との二つの働きとして概念化されており、かつ、その双方ともが、良心の高まりという道徳性の発達と関連づけて論じられているのである。

したがって、次の問いが生じる。社会規範の内面化としての超自我論と、超自我と自我の二つの審級それぞれの変容に関わる反動形成は、フロイトの道徳性理論の中でどのように結びついているのだろうか。もし、これらが同じ心的過程を別の側面から論じたものであるならば、道徳性の発達とは、強迫神経症的な性格の形成を意味することになる。フロイトは確かに、人の道徳性にはそうした一面があることを否定しない。さらにフロイト (1915) は、この意味において「教育」が人を強迫神経症的にしてゆく営みであるということを、「教育による強迫

(Zwang der Erziehung)」という表現により強調してもいる。

しかし同時に、フロイトは人の道徳性をこの強迫的な性質に還元しきるわけでもない。というのも、超自我の形成を道徳性の発達として評価する研究では見落とされがちであるけれども(大西 1992, 下司 2016)、そもそもフロイト(1930, 1932)は、厳格すぎる超自我による自我の支配を行き過ぎと批判しており、治療においては超自我の影響を緩め、自我の独立を援助することを目指すからである。その際、超自我から自立して欲望に対峙する自我のあり方には、強迫的な良心としての超自我とは異なる道徳性、欲望の統御のあり方が体现されている。だとすればそうした自我の道徳性は、フロイトの理論の中でどこに位置づけられるのか。結論を先取りしていえば、これこそ、本論がこれから丁寧に検討してゆく、「自我変容」としての反動形成なのである。さらにいえば、フロイトの「自我変容」に着目することで、人を強迫神経症的なあり方とは異なる道徳性へと成熟を促す教育のあり方を、構想する手がかりが得られるだろう。

以上の問題を検討するため、本稿は、フロイトが強迫神経症についての思索を深めた論文「強迫神経症の一例についての見解」(1909)、いわゆる症例「鼠男」と、強迫神経症とのつながりから「教育」について論じたテキストを検討する²。第2章では、フロイトの「道徳性」概念を、「社会規範」の内面化と、それによる「抑圧」の強化という側面に着目して改めて整理し、この論点が後期フロイトの超自我論に引き継がれてゆく過程を明らかにする。第3章では、症例「鼠男」の検討に着手し、「道徳性」の強化と関連づけられる性格変容には、フロイトが明瞭に区別しなかった二種類の「反動形成」が関与していることを指摘する。「自我変容」としての自我の性格が形作られる「反動形成」と、良心(後の超自我)による自己非難を強める「反動形成」である。第4章では、フロイトの教育論および超自我論を検討して、自己非難を強める「反動形成」の論理が、「死の欲動」といった新たな理論的観点と統合されて引き継がれつつ、自我の性格変容に着目した「反動形成」の論理も、超自我に還元しきれない自我の道徳性を確保するために、後期フロイトの理論に伏流していたことを明らかにする。結論では、自我変容としての反動形成が、超自我から独立して良心の強迫性を和らげつつ、かつ無意識の欲望とも対峙するという、自我の道徳的態度のあり方を示しうることを論証する。

2. フロイトの超自我論—社会規範の内面化と欲望の抑圧

フロイトの理論において、「道徳性」と関連する主題は頻繁に登場し、かつ、多面的な広がりをもっている。本稿では次章以降、強迫神経症に特徴的な反動形成に着目して、フロイトの道徳性理論を検討してゆく。その前の準備作業として、本章では改めて、後期フロイトの超自我論として前景化する、彼の最もよく知られた道徳性理論の内実を確認しておきたい。

フロイトの超自我論の基本的な構図は、彼の初期の著作からその萌芽を確認できる。そもそも精神分析は、自我の道徳的性向により無意識へと抑圧された性的欲望が、身体上に回帰して生じるヒステリー症状の治療を目指して開始された。フロイトの初期の著作には、自我の道徳性を強める営為としての「教育」への言及が度々登場する。彼の着眼点の新しさは、そこに欲望の無意識への「抑圧」という視点を導入したことである。つまり、外的規範の内面化により人は道徳的とはいえない欲望や情動を無意識へと抑え込む(G.W., 4: 306/全, 7: 336)。その事態をフロイトは端的に、「善への教育」は「悪」を無意識へと抑圧すると述べている(G.W., 4:

289／全, 7: 317)。

さらにフロイトは1915年の論文「戦争と死に関する時評」において、社会規範の内面化を促す営為としての「教育」の特徴を論じている。人々は同胞や教育者からの制裁を怖れて社会規範に従うのであり、文明社会は人々に対して絶え間ない欲動の抑え込みを課す (G.W., 10: 335／全, 14: 145)。同論文では、教育が与える外的な規範を人が徐々に内面化してゆくことが、道徳性の発達として捉えられている (G.W., 10: 333／全, 14: 142)。

こうした図式は、『自我とエス』に登場する第二局所論 (自我・エス・超自我) に引き継がれる。フロイトはそこで、個人の道徳性や良心を「超自我」と呼び表す³。超自我は、子どもが両親との「同一化」を通して、両親の超自我を内面化することで形成される。後期フロイトは超自我の形成と人の道徳的な成熟を重ねて論じる。『ある錯覚の未来』(1927)によれば、子どもは周囲の人からの「外的強制」を内面化し、「超自我の強化」を通して初めて道徳的かつ社会的になってゆく (G.W., 14: 332／全, 20: 10)。また、『続・精神分析入門講義』(1932)によれば、幼児期の未熟な自我は、超自我の力を借りながら「快原理」に従う欲望を「制止」しようとする (G.W., 15: 68／全, 21: 81)。こうして規範に従い自己の「悪い」欲望を抑圧するのは、「超自我の仕事」、あるいは、「超自我に従順な自我がその指図を受けて」行う仕事なのである (G.W., 15: 75／全, 21: 90)。

以上のように展開されたフロイトの超自我理論は、前章でも言及したように、特に自我心理学派の流れにおいて、道徳性の発達と自我の成熟を描いた理論として解釈されてきた。しかし、これが道徳性の発達について語られたことの全てではない。フロイトは後期の著作『制止、症状、不安』(1926)の中で、自我が「良心」の性格を強める心的機制を「反動形成」と呼び、かつ、強迫神経症患者の反動形成を、「通常性格形成が極端になったもの」と位置づけている (G.W., 14: 144／全, 19: 42)。自我の反動形成はどのように道徳性の発達に関与するのだろうか。また、その道徳性理論は超自我理論とどのような連関のうちにあるのだろうか。次章では、強迫神経症患者の反動形成が本格的に考察された症例「鼠男」を検討して、この問いに迫りたい。

3. 鼠男の「性格変容」

本章では、フロイトが強迫神経症に特有の反動形成という観点から道徳性の発達を論じたテクストを、症例「鼠男」を中心に検討する。鼠男 (本名、エルンスト・ランツァー) は、種々の「強迫神経症」⁴症状に苦しみ、1907年10月1日にフロイトのもとを訪れる。愛する父と婦人が死ぬのではないかと怯える鼠男は、他者への配慮や「悪い」欲望の抑圧という点においては、並外れて道徳的な人物であった⁵。そうした性格はどのように形成されたのか。本章では、その素因としての心的特徴や機制、そして性格が変容した転機を、節を分けて考察したい。

3-1. 道徳性を高める二種類の「反動形成」

鼠男が訴える苦悩の主たる内容は、子どもの頃から続きここ数年でさらにひどくなった「強迫的表象」であった。その内容は、彼が最も愛する父親と、ある婦人に、何か悪いことが起こるのではないかという恐れである (G.W., 7: 384／全, 10: 182)。分析を通してフロイトは、鼠男の心のうちに、父親と婦人に対する並外れた強度の愛と憎しみの併存を見て取る (G.W., 7: 455

／全, 10: 264)。彼の症状は、同一人物に対する両価的な感情の葛藤から生じてきたのである。

しかし、強力な愛と憎しみが常に併存しているのは、決して容易なことではない。それが持続するには、ある「特殊な心理学的条件」が必要となる。その条件こそ、本文で術語としては登場していないものの、心的機制の一つである「反動形成」である。フロイトは述べる。

愛は憎しみを消し去ることができず、ただ無意識に押しやることしかできない。そして無意識の中で憎しみは、意識の作用によって無効化されることから守られて自らを維持し、さらには成長さえも見せる。意識的な愛は、こうした状況下では、それに対する反動のように (reaktionsweise)、特段に高い強度にまで膨らむのが常である。それによって愛は、自らに対立する動きを抑圧の中に押しとどめるという持続的に課せられる課題を遂行できるのである (G.W., 7: 455／全, 10: 264)。

つまり鼠男の道徳的な性格は、無意識の中で成長する憎しみへの抑圧を維持するために、自我に意識されうる愛がその反動として、過剰なまでに高まったものと理解されるのである。

これと同じ心の働きは、症例「ドーラ」(1905)においても「反動強化 (Reaktionsverstärkung)」という名で論じられている。フロイトは、たとえ様々な反論を加えても決して変化が生じない思考の連なりは、その強化を無意識に負っていると指摘する。すなわち、その思考の連なりの根が抑圧された無意識にまでつながっているか、あるいは、その思考の連なりの背後にそれとは別の無意識の思考が隠されている。そして後者の場合、隠された無意識的な思考は、たいてい強力な思考とは正反対のものである。「反対物はいつもお互いに密接に結びついており、しばしば、一方の思考は非常に強力な意識となり、もう一方の思考は抑圧されて無意識となる、といった性質の対を作るのである。このような関係は抑圧過程の一つの成果である。すなわち抑圧は、しばしば、抑圧されるべき思考とは正反対のものが過度に強化されるという仕方ですべて遂行されてしまう。これをわたしは反動強化と名づけ、意識のなかで非常に強力に主張される、偏見と同様に分解解消できないもう一方の側の思考を、反動思考 (Reaktionsgedanken) と名づけることにする」(G.W., 5: 215／全, 6: 66) ⁶。

このように論じられた、無意識に抑圧された欲望に対する反動によって高まる意識的な性格の形成過程は、1915年の論文「抑圧」の中でより整理して提示される。フロイトは鼠男の症例を下敷きとしながら、強迫神経症における「抑圧」の働きを、成功する第一期と失敗する第二期とに分けて考察する。

第一期では抑圧は完全に成功し、自我との葛藤を引き起こすような欲望の表象は駆逐されて情動は消滅に向かう。代替形成としては「自我変容 (Ichveränderung)」、すなわち「良心の高まり (Steigerung der Gewissenhaftigkeit)」が生じる。ここでは、「対立物の強化を通じての反動形成が、役に立っている」(G.W., 10: 259-260／全, 14: 207-208)。こうして自我は、実は無意識の憎しみが向けられている当の人物に対して、自我に意識される感情としての愛情を強め、その人を傷つけてはならないという配慮を過剰に高める。

このようにフロイトは、反動形成を経て、自我が無意識の抑圧されたものとは反対の傾向に変容してゆく過程を「自我変容」と呼ぶ。ここでの自我変容とは、自身にも意識されうる性格

が、自我に意識されない仕方で、つまりは無意識的に変容していくような過程である。

実はこの「自我変容」は、十川幸司が指摘する通り、「フロイトの理論体系の中で明確な位置を持つことなく、彼が着手したものの、形成途中で終わった概念」である（2019: 133）。それはフロイトの思索において、決して確定的な意味を担うことはなかった。しかし、フロイトが反動形成と重ねて論じた「自我変容」には、自我の道徳性をめぐる重要な見解が示されている⁷。

論文「抑圧」は「自我変容」を「反動形成」と重ねて理解していた。この自我の性格の変容について、後期フロイトの『続・精神分析入門講義』（1932）には重要な文章が記されている。

性格と呼ばれているあの定義しがたいものは、まるごとこの自我に属するものです。私たちは、この性格というものを作り上げている契機を、すでにいくつか掴んでおります。[……] もうひとつ、性格形成にいつも寄与しているものとしてつけ加えておきたいのは、反動形成です。これは、自我が、最初期には抑圧を行使する際に、のちには、望ましくない欲動の蠢きを拒絶する際に、より正常な手段を通して手に入れるものなのです（G.W., 15: 97／全, 21: 117-118）。

このように反動形成は、フロイトにより幅のある意味づけが与えられている。それは一方で、自我のある意識的な性格が自我には知られていないあり方で強化される過程であり、他方で、抑圧とは異なる仕方で欲望を拒絶する際のより正常な手段でもある⁸。こうした幅はありつつも、自我変容としての反動形成は、自我の意識的な性格の形成に関わる心的過程である。

それに対して、症例「鼠男」の文中に一度だけ術語として登場する「反動形成」の含意は、たった今確認したものと微妙に異なる。論文の末尾でフロイトは、「鼠男」の心理状態を三つの人格に分割する。一つの無意識的な人格と、二つの前意識的な人格である。彼の無意識には、早い時期に抑圧された怒りに満ちた心の動きが含まれていた。通常の状態にある鼠男（第一の前意識的な人格）は、「善良で、快活で、優れた人物」とも形容できる。しかし、第二の前意識的な人格が優勢である時には、迷信を信じ、禁欲に忠実であった。この人格は、「彼の抑圧した欲望に対する反動形成を主な内容としている」。病気が続けばこの人格が通常的人格を呑み込んでしまうだろう、とフロイトは書いている（G.W., 7: 463／全, 10: 273）。

この禁欲的な第二の前意識的人格は、明らかに第二局所論の超自我を予示している。興味深いのはその性格である。それは無意識へと抑圧された憎しみに対する反動として形成され、欲望を禁止する人格として、通常的人格を支配し呑み込もうとする。ここで「反動形成」が意味するのは、強い攻撃欲や憎しみを保持する無意識に対して、それを禁止するという意味での反対の心の働きを強化する過程である。かつ、欲望の禁止を担う人格と通常の状態にある人格の間には、前者が後者を支配する関係性が指摘される。

この意味での反動形成は、論文「抑圧」において、憎しみの抑圧に成功した第一期に続いて登場する。失敗と評される第二期は、抑圧された憎しみが回帰する段階である。しかも憎しみは、「社会不安、良心不安、仮借なき自己非難」へと変成して回帰するのだという。つまり、愛する人への憎しみは、今度は自己へと向き変わり、自己自身に対する過激な「非難」、言葉の攻撃という衣をまとって、心のうちに回帰してくるのである（G.W., 10: 260／全, 14: 208）。

このように症例「鼠男」と論文「抑圧」の記述を見てゆくと、強迫神経症者の良心が高まる過程が、差異を含む二つの意味での「反動形成」という観点から論じられている。第一に、無意識の抑圧された欲望とは反対の傾向へと自我の性格が変容する過程であり、これは自我の性格形成である「自我変容」に関わる機制である。第二に、自我を非難し支配する良心の性格を強める働きであり、これは後期フロイトにおける超自我の形成と重なる心的過程である。

3-2. 「善」へと転回する「悪」

前節では、鼠男の良心を高める二種類の反動形成の内実を検討した。この反動形成と関連して、症例「鼠男」および1915年の戦争論の中でフロイトは、彼の思索に一貫して通底する欲動論と人間観を表明している。それは、鼠男の道徳的な性格形成への転機という論点に関わる。

鼠男は子ども時代、今とは別人のような欲望に従っていたことを認める(G.W., 7: 401/全, 10: 201-202)。分析の結果、フロイトと鼠男は、患者が母親から繰り返し聞かされていた次のような過去の記憶に到達する。まだとても小さい頃、彼は悪事を働き父親から殴られた。その時彼は恐ろしく憤り、殴られながらも父親を罵倒し続けたという。父親は、鼠男の怒りの爆発の様子に衝撃を覚えて殴るのを中断した。鼠男によれば、

「この場面の印象は、私にも父にもずっと影響し続けるものでした。父は私を二度と殴りませんでした」。そして、彼自身、性格変容(Charakterveränderung)の一部をこの体験から導き出している。「自分の怒りの大きさに不安を覚えて、私はこの時から臆病になりました」(G.W., 7: 427/全, 10: 231)。

つまり、大人になった鼠男の他者への優しさの根源には、その見かけとは反対に、幼い頃の彼の他者に対する強い憎しみや怒りがあったのである。彼は自らの抱える怒りのあまりの大きさに恐れ慄き、その不安が自我の性格の変容をもたらした。ここに見られるのは、人間の優しさがそれとは反対の傾向性に対する反動として形成される、という論理である。

1915年の戦争論では、この性格の転換という論点がより抽象的に論じられる。フロイトは攻撃性をはじめとする人の「悪」を、後に「善」へと転回する契機として評価する。「教育」は人間の「悪い」傾向性を「善」への傾向性に置き換える。そうした通念に対して、フロイトは次のような精神分析的洞察を提示する。私たちは欲動を社会的な人間関係の観点から「善悪」に分類している。あらゆる人が抱える欲動の原始的状态は、社会規範の基準からみれば「善悪」両面を併せ持つ。「悪」と評価され忌避される欲動の代表として、人の「自己愛的傾向性」と「残酷さ」がある。そしてこれらの「悪」は決して「根絶」されることはない(G.W., 10: 331-332/全, 14: 141)。

それに続けて、フロイトは人間の発達を通じた性格の形成について論じる。人間の心のうちにあり続ける原始的な「悪い」欲動は、人が子どもから大人へと成長する過程で、それとは反対の見かけを装うことがある。「あたかも利己主義から利他主義が、残酷さから思いやりが生ずるかのよう」(G.W., 10: 332/全, 14: 141)。これこそまさに「反動形成」の働きである。おそらく鼠男を想起しながら、フロイトは続ける。「次のような経験は興味深い。それは、強力な「悪

い」蠢きが子どもの頃にまず現れることが、しばしば、成人が「善」へと、ことのほか明白に転回するためのまさしく条件となるということを見聞きする経験である。もっとも強烈で子どもっぽい利己主義者たちが、もっとも親切で献身的な市民になりうる。情け深い人や人類愛者や動物愛護者はたいてい、幼きサディストや動物虐待者から発達したのである」(G.W., 10: 332-333/全, 14: 142)。

このようにフロイトは、人の攻撃性や残酷さといった「悪」と呼ばれる傾向性に一定の評価を与える。というのも、「悪」こそ「反動形成」を経て、それが「善」であるかのように自身の姿を「欺く (täuschen)」ことで、後の道徳的な成熟に寄与するからである⁹。

4. 「教育」という営みと強迫神経症

これまで見てきたように、フロイトは強迫神経症者による「反動形成」のうちに、良心の高まり、すなわち、道徳性の強化を見ていた。しかし詳細にその内実を明らかにしてゆくと、「反動形成」は自我の意識的なある傾向性を強める働きと、自我を支配する良心の強制力を強める働きとの、二つの意味の系譜があることが判明した。以上の二つの「反動形成」の論理は、それ以後のフロイトの教育論と道徳性の発達理論にどのように継承されてゆくのだろうか。

4-1. 「教育による強迫」

前章で検討したように、フロイトは「悪」と分類されうる攻撃性や憎しみといった欲動の傾向性を、人が後に「善」へと転回する契機として評価していた。さて、鼠男の場合、自らの怒りの大きさに戦慄を覚えたことが、後の性格が優しくなる転機となっていた。それに対して、戦争論でフロイトは論述の対象を人間全般に広げ、文明に住む人々の「悪」から「善」への行為の転換を扱っている。そこにおいて転回を促す要因とは何なのだろうか。

ここで契機としてフロイトが提示するのが、「教育」なのである。なおかつフロイトは、それを「教育による強迫 (Zwang der Erziehung)」と呼ぶ。フロイトによれば、被教育者に反動形成が生じるのは、愛を利用した脅迫においてである。つまり、教育者は愛の提供と取下げを「賞罰」として利用することで、被教育者を反動形成へと誘う。被教育者は教育者の愛を獲得するために、自らの欲望を断念することを学習するのである。その過程は、「外的強迫から内的強迫への絶え間ない置き換え」と評される (G.W., 10: 333-335/全, 14: 142-144)。

したがって、この「教育による強迫」という語には二つの含意が認められる。第一に、愛を賞罰に用いる「教育」それ自体が、被教育者に対する教育者の優位な支配的立場を利用して、被教育者に規範の内面化を強いる強迫的な営みである (外的強迫)。第二に、「教育」はさらに、その二者関係を、被教育者による自己支配へと置き換えることを励ますことで、被教育者の良心に強迫性という特徴を付加する (内的強迫)。この過程は、自我の支配を強める良心の側面に着目しているという点において、前章で辿った二つの系譜のうち、良心の自己非難の力を強める「反動形成」につながるものである。

この外的強迫の内的強迫による置き換えという表現は、両親との同一化を契機とした超自我形成の論理を先取りしている。このように戦争論は、道徳性の発達を促す「教育」とは、実は子どもを強迫神経症的にしてゆく営みであることを、直截に表現している。

4-2. 「超自我」の形成と強迫神経症

戦争論が提示する「教育」のあり方は、1920年以降の後期フロイトの思索において前景化してゆく。超自我の起源は、子どもが両親との「同一化」を通して、両親の超自我を「内面化」することにある。その後には発達の途上で、教育者や先生、理想とする人たちが、両親に代わり被教育者の超自我の形成に影響を与えてゆく（G.W., 15: 68-73／全, 21: 81-87）¹⁰。

この超自我の設立に際しては、戦争論において指摘された愛による脅迫が用いられる。そもそも後期フロイトは、『制止、症状、不安』において、人の出生に起因する「原不安（Urangst）」という状態を導出し、人間の根源的な状態としての「寄る辺なさ（Hilflosigkeit）」を強調するようになる。「人間が非力で寄る辺なく他者に依存せざるをえない」という生物学的な事実が、超自我の形成に甚大な影響を与える。というのも、生命の維持を他者に依存せざるをえない子どもにとって、親の愛とともにその庇護を失うことは、生命の危機に直結するからである。この「愛の喪失に対する不安」から、子どもは親が示す社会規範や善悪の価値基準を呑み込まざるをえない（G.W., 14: 483-484／全, 20: 137）。

こうした超自我の形成過程は、大人に成熟した後も自我と超自我との関係を規定する。

超自我は、のちのあらゆる影響を受け入れはするものの、父コンプレクスからの出自によって与えられた性格、すなわち、自我に対立して自我を制御するという能力については、一生涯これを保持しつづける。超自我は、自我のかつての脆弱さと依存性の記念碑であって、そのため、成熟した自我に対しても支配権をふるいつづける。子供が理屈抜きで両親に従わなければならない強迫のもとにあったように、自我は、超自我の定言命法に従順に従うわけである（G.W., 13: 277-278／全, 18: 47-48）。

戦争論で用いられた「内的強迫」という表現は、超自我としての良心の別名にふさわしい。

さらに良心の強迫性は、超自我が自我を支配する力の出处という経済論的観点からも考察される。後期フロイトによるその答えは、『快原理の彼岸』（1920）において導入された「死の欲動（Todestrieb）」の攻撃性である。

立木康介は、「死の欲動」に確認される三つの〈時〉を以下のように整理している（2007: 196）。生体を崩壊に至らせ、生なき物質の状態に連れ戻そうとする「死の欲動」は、あらゆる生物の中に沈黙しながら働いている（第一の時間）。そして、死の欲動が生欲動と身体内部でぶつかる時、それは外部へと、対象へと差し向けられ、「破壊欲動」として現れる（第二の時間）。しかし、たとえ死の欲動が外部に差し向けられたとしても、その一定部分は、生物の内部に残存し続ける。この「破壊欲動の内面化」、「攻撃性」が内部へと向けられることが、「良心の成立」についての精神分析的説明である（G.W., 16: 22／全, 20: 267）。第三時間のタナトスは、元々の沈黙さからは好対照を示し、「父親から超自我に貸し与えられた声が、死の欲動の要求を過激に代弁しつつ、自我を駆り立て、圧迫し、打ち拉ぐ」（立木 2007: 215-216）。このように、死の欲動の攻撃性の内面化から、良心による自己非難の過酷さを論証するフロイトの思考の道筋は、論文「抑圧」における良心の「反動形成」の論理、すなわち、抑圧された憎しみの自己への向

け変わりという論理と一致する。

こうして1926年の著作『制止、症状、不安』において、フロイトは強迫神経症者の「反動形成」と、健常者の「性格形成」を結びつけて提示する。強迫神経症においては、エディプスコンプレックスの破壊に伴う超自我の設立が、通常の程度を超えてしまう。そこではリビードが「退行」し、「超自我はとりわけ厳格で愛情を欠くものとなり、自我は超自我への従順のうちに、良心性、同情、潔癖など高度な反動形成を増長させる」（G.W., 14: 144／全, 19: 41-42）。こうしてフロイトは、「強迫神経症患者の自我における反動形成を通常の性格形成（Charakterbildungen）が極端になったもの」と認める（G.W., 14: 144／全, 19: 42）。この文脈における自我の「性格形成」とは、自我を支配し責め苛む強迫的な良心としての超自我が強くなってゆく過程である。加藤敏は以上の記述を念頭に置きつつ、「神経症の中でいずれの類型が最も正常人に近いかという設問をあえて立てるなら、このフロイトの言葉からは強迫神経症ということになるだろう」（2010: 368）とまとめている。

だが、第3章で扱った症例「鼠男」と同じく、『制止、症状、不安』においても、上記の指摘とは異なるもう一つの「反動形成」のあり方が認められるのである。論文の末尾において、フロイトが言及する「反動形成」の焦点は、超自我よりも自我にある。抑圧された欲望は無意識において増長し、常に意識への回帰を狙い続ける。そのため自我は、抑圧を維持する永続的な負担が要求される。この「抑圧の保護のための行動」を、フロイトは「対抗備給（Gegenbesetzung）」と呼ぶ。「対抗備給」とは、自我が抑圧を維持するために発する備給である（G.W., 10: 280-285／全, 14: 229-234）。強迫神経症において対抗備給は、「自我変容また自我における反動形成の形をとって、抑圧されるべき欲動の方向とは反対方向へ向かう態度（同情、良心的であること、潔癖）の強化によって現れる。強迫神経症におけるこの反動形成は、潜伏期の経過において発展する正常な性格特性が著しく誇張されたものである」（G.W., 14: 189-190／全, 19: 85）。ここで自我変容および対抗備給という言葉が現れている通り、ここでの「反動形成」とは、超自我に服従した自我の側面よりも、欲望に対峙する自我の性格変容に着目した心の働きである。

以上の考察から、フロイトの二つの反動形成の系譜については、次のようにまとめられる。良心の支配力を強める「反動形成」は、両親との同一化と死の欲動の内面化を二つの起源とする超自我理論として統合されて、後期フロイト思想の中核に位置するようになった。それに対して、自我の性格変容を説明する「反動形成」の理論は、道徳性の論点において決して前景化することはなかったが、彼の理論のうちに一つの伏流として残り続けた。いいかえれば、フロイトは超自我に回収されない自我の道徳性という論点を確保し続けたともいえるのである。

5. おわりに

最後に、これまでの考察結果をまとめたい。フロイトの道徳性理論には、内面化された超自我による欲望の抑圧を軸に考察したものと、反動形成を軸に考察したものの二つがある。さらに反動形成をめぐる理論は、超自我の強化に力点を置くものと、自我変容に焦点を当てたものの二つに分かれる。第一の反動形成は、内面化した死の欲動のエネルギーを汲み取りながら、より厳格になってゆく超自我としての良心の強化を理論化している。この観点から見ると、確かにフロイトのいう「教育」とは、それが社会的な「悪い」欲望の抑圧を学習させ、道徳性

の発達を促すとしても、被教育者を強迫神経症的にしてゆく営為であるといえるだろう。

それに対して、自我に焦点を置く第二の反動形成は、無意識に抑圧された欲望に対抗して、自我の性格が変容する過程に着目する。この自我変容としての反動形成は、後期フロイトの思索の中で後景に退いている。しかしなぜ後期フロイトは、人の道徳性を説明する超自我という強力な概念を手に入れた後にも、この自我の道徳性を確保し続けたのだろうか。

その理由は、精神分析の治療実践に目を向けることで明らかになる。フロイトは、超自我の発達を人を強迫神経症的性格に追い込むという点を、治療で克服すべき一つの課題と認識していた。精神分析とは、超自我の苛酷な支配から自我が「独立」していく過程を促す営為である (G.W., 15: 86/全, 21: 104)。そのために分析では、時に自我に対する超自我の影響力を緩めようとする (G.W., 14: 503/全, 20: 159)。こうした方針は、しばしば誤解を受けたように、社会規範に抵触する欲望の充足をただちに認めることではない (G.W., 11: 450/全, 15: 523)。むしろ自我には、それまで認めようとしてこなかった自らの無意識を視野に収めつつ、場合によっては意識化された欲望を心のうちに留め置くという、超自我に依存していた時よりも、ある意味では労力のかかる道徳的態度が要請される。そうした自我のあり方への理論的な支柱を与えるために、フロイトは自我の反動形成としての道徳性を残し続けたと理解できるのである。

つまり、本稿が抽出した二つの「反動形成」の差異は、以上に記した超自我からの自我の自立の過程を、良心の質の変容に着目して理論化する道をひらく。内向した憎しみに駆動された反動形成が描き出すのは、超自我としての良心、すなわち、無意識的かつ強迫的に、自我を責め苛み支配しようとする良心である。それに対して、自我変容としての反動形成がもたらすのは、自我に意識されうる性格としての欲望に対抗する良心である。この自我の良心には、超自我にあるような過剰さや強迫さといった性格は必ずしも認められない¹¹。とするならば、自我が超自我から自立していく過程とは、超自我という強迫的な良心を、「超自我の偽の理想主義」や「潔白意識のもつ悪意」に反対しながら (リクール 1982: 303)、欲望に対峙する自我の意識的な良心へと変容させてゆくこと、といえないだろうか¹²。

精神分析治療を以上のような良心の変容を促すものと見定めるとき、自我の道徳性のあり方への思索は、実は症例「鼠男」のうちにも先駆的に読み取ることができる。最後に、自我の道徳性を考察するための手がかりを、症例「鼠男」の論述から引き出したい。

フロイトは分析の過程で、鼠男の激しい「自己非難」の情動、罪責意識は、本来は無意識に抑圧された表象に結びついた正当なものなのだと説明する。重要なのは、非難にふさわしい無意識の表象を発見することである。無意識的表象は、意識化されることによって初めて、そこから欲望の充足を求める力が取り除かれる。それに続けて、鼠男とフロイトは次のように言葉を交わす。

「おそらくある人は、発見した後、非難を克服するという風になるのですが、別の人は違うのではないですか」。—「いいえ、こうした事態の本性として、そうなると情動はいつも、大抵はすでに〔治療の〕作業中に、克服されるのです」(G.W., 7: 400-401/全, 10: 201-202)。

いわゆる道徳的な成熟とは、自己の「悪い」欲望に対する非難や批判の態度を強めてゆくこととイメージされるだろう。しかし、フロイトはむしろ、非難を「克服」する、つまり緩めることが重要であるという。そのために、非難が抑えつけている無意識的な想念を直視するよう鼠男に促す。無意識の欲望が意識に現れれば、そこで初めて、その欲望や情動が保持していたエネルギーは摩滅し、その欲望に対して荒立つ非難の力もおさまってゆく。それによって、禁欲的な第二の前意識的人格による苛酷な自己非難に代わって、第一の前意識的人格による無意識の欲望の承認と統御が可能になる。そうした自我の姿には、欲望に対峙する意識的な良心のあり方が体现されている。

さらにまた別の日には、無意識の意識化について次のような会話がなされる。鼠男は、愛する婦人との結婚に反対した父親の妨害は、父に対する愛情の大きさと比べたら問題にならないと、どうして自分で決着をつけられなかったのかと問う。フロイトは次のように応答する。

いない人を殺すのは困難なことです。そのような決着のつけ方を可能にするには、抗議の矛先を向けられる欲望がその当時に初めて現れる必要がありました。しかし、その欲望は古くに抑圧された欲望でした。それに対してあなたは以前と対処の仕方を変えることができず、それゆえその欲望は根絶を免れ続けたのです（G.W., 7: 406/全, 10: 207）。

『全集』の訳者は、ここに付された訳注において、以上の議論は「抑圧」と「断罪（Verurteilung）」という二つの概念の説明になっていると述べる（福田寛 訳注 50 全, 10: 414）。フロイトによれば、妨害者である父親を排除したいという欲望は、鼠男が幼い頃にすでに生じ、かつ抑圧によって対処したものであった。抑圧は、欲望を無意識へと追放することにより、むしろその地での欲望の発展を許す。それに対して、「断罪」とは、1910 年代フロイトが度々用いた術語であり、自我が当該の抑圧された欲望を意識化した上で、それを批判し統御する働きである。症例「ハンス」（1909）では精神分析の目的が端的に、「分析は抑圧を断罪で置き換える（強調—フロイト）」と言明されている（G.W., 7: 375/全, 10: 172）。

この「断罪」という意識の態度は、前意識的な禁欲的人格（超自我）に対抗しながら、無意識の欲望への抑圧を「解除（Aufhebung）」し意識化した上で、その欲望の実行を「棄却（Verwerfung）」し保持するという自我の態度である¹³。これは先に記した、超自我とは区別される、強迫的でなく意識的な自我の道徳性を、心的機制の側面からいいかえたものでもある。反動形成としての自我変容に示された自我のあり方は、フロイトが書き残した他の心的機制の概念群によって、どのように理解されていたのか。そして、そうした道徳性へと自我の成熟を促す教育は、どのように構想されうのか¹⁴。これらの問いを、今後の検討課題としたい。

註

¹ ラブランシュ・ボンタリス（1977: 384）。

² 本稿はこれから、フロイトが「教育による強迫」という語彙に含意させた「教育」の内実を検討してゆく。しかし、フロイト自身の「教育」概念は非常に多義的であり、本稿で探求するのは彼の教育をめぐる思索のうちの一部である。フロイトが精神分析それ自体を「事後教育（Nacherziehung）」と呼び特徴づけていたことについては、D.ブリッツマン（2003: 4-6）およ

び須川公央（2006）を参照。

- ³ 後期フロイトの著作では、人の「個体発生」における超自我の発現や形成、強化の過程が、時に「系統発生」の論点と絡められながら考察が深められてゆく。E.ヘッケルの「反復説」など、フロイト思想が当時の生物学理論から引き継いだ要素については下司（2006）を参照。
- ⁴ 精神病理学において「強迫神経症（強迫症）」は、心的な葛藤が「不安を伴った思考（強迫観念）」や「イメージ（強迫表象）」として現れる病と理解される。患者には、そうした不安を解消するための何らかの「行動（強迫行為）」も生じる（松本卓也 2018: 163）。
- ⁵ 論文「強迫神経症の素因」（1913）においてフロイトは、強迫神経症者が発達させるものを「超道徳（Übermoral）」と呼ぶ（G.W., 8: 451／全, 13: 200）。
- ⁶ ドーラの場合、フロイトは意識的に努力しても決して解消できない、父親に対する彼女の「強迫的な心配」の根に、父親に対する「無意識的な恋愛関係」を推定する。鼠男とは反対に、ドーラは愛を無意識に抑圧することによって、父親への心配や批判が過剰に高まっていると理解されるのである（G.W., 5: 216／全, 6: 66-67）。
- ⁷ 「自我変容」という概念は、フロイトの異なるテキストにおいて様々な意味を担うのだが、十川は其中でも、対象との同一化を通して自我の性格が変わってゆくこと（『自我とエス』）、経験を通して自我が豊かになってゆくこと（『自我とエス』）、自我の防衛機制（『終わりのある分析と終わりのない分析』）という、フロイトの三つの用例を取り上げ検討している（2019: 131-135）。ラプラシシュ・ポンタリスも、この概念を自我の防衛機制として理解している（1977: 172-173）。しかし同概念は、彼らの考察から抜け落ちている「反動形成」の文脈においても、本文で論じるように重要な意味を担っている。
- ⁸ 反動形成に「正常な（normal）」性格形成とのつながりを見出す視点は、4-2 でも引用する『制止、症状、不安』の次の文章にも示されている。「強迫神経症におけるこの反動形成は、潜伏期の経過において発展する正常な性格特徴が著しく誇張されたものである」（G.W., 14: 190／全, 19: 85）。
- ⁹ 『性理論三篇』（1905）においてもフロイトは、同型の論理にもとづき人の欲動を、「わたしたちの多くの徳を生み出すその源泉」として評価している（G.W., 5: 141／全, 6: 305）。
- ¹⁰ こうした観点は、フロイトが超自我の前身である「自我理想」の形成を初めて論じた論文「ナルシシズムの導入にむけて」（1914）の時期から、一貫して保持されている。同論文でフロイトは、自我理想の形成を促す力は、「声によって媒介された両親の批判的な影響力」に由来し、時が経つにつれて、それに「教育係」や「教師」、「同胞たちや世論」の影響力が加わっていくと述べる（G.W., 10: 163／全, 13: 144）。
- ¹¹ 自我の良心は、フロイトが正常な性格形成とのつながりを指摘した反動形成ではなく、症例「ドーラ」において「反動強化」と呼んだような過程を辿れば、超自我としての良心に匹敵する過酷さを帯びうる。良心の質が変容するには、本文でこれから症例「鼠男」を参照して論じるように、精神分析を介した無意識の欲望の意識化が必要となる。自我変容としての反動形成のうちに見られる二重性の詳細な検討は、今後の課題としたい。
- ¹² この超自我としての良心と自我の意識的な良心を、厳密に区分することは不可能である。フロイトは『制止、症状、不安』の中で明快に、多くの状況において自我と超自我は融合しており、「両者の間に緊張関係や葛藤が形作られた際に、はじめて両者の区別ができるという場合が殆どである」と述べている（G.W., 14: 124／全, 19: 22）。しかし、そうであるからこそ、超自我に対して自我の強迫的でない意識的な良心を強調することが重要である。藤山直樹も、「自我を脅かす超自我の側面はある種迫害的蒼古的な良心の側面」であって、「私たちが日々の生活を送るときに尊重している倫理道徳感情とは水準が異なっている情緒であるようにどうしても感じられてしまう」と述べている（2011: 48）。その上で、「たとえば、良心や倫理や理想や自己観察の万能的蒼古的迫害的でない側面、中立的で現実的な側面は自我の機能とみなしうるかもしれない」と述べる（2011: 50）。藤山の指摘は、本稿が強調するのと同じ自我の道徳性に着目している。
- ¹³ 1910年代のフロイトは、成熟した自我が、抑圧に代わって欲望と対峙する際の心的機制を、

「断罪」や「棄却」、「判断 (Urteil)」、「判断棄却 (Urteilsverwerfung)」など多彩な概念を用いて語っている。フロイトの「判断」概念については、別の機会に詳しく論じる予定である。¹⁴ フロイトは、強迫的でなく意識的な良心としての道徳的なあり方へと自我が成熟することを、「事後教育」としての精神分析の目標と捉えていた。本稿の論点とフロイトの事後教育との関連については、別稿を用意している。

参考文献

【フロイトの文献】

※フロイトの文献からの引用は、以下の省略記号 (版, 巻: 頁) を用いて引用箇所を示す。なお、訳出に際しては邦訳を参照しつつ、適宜改訳した箇所がある。

G.W.=Gesammelte Werke: Chronologisch Geordnet, 18 Bde., Bde. 1-17, London : Imago Publishing, 1940-52, Bd. 18, Frankfurt : S. Fischer, 1968.

全=新宮一成・鷺田清一・道築泰三・高田珠樹・須藤訓任編『フロイト全集 (全二二巻+別巻一)』岩波書店、2006-2020.

【その他の文献】

大西文行 (1992)「精神分析理論—フロイト (Freud,S.)」日本道徳性心理学研究会編『道徳性心理学—道徳教育のための心理学—』北大路書房、3-14 頁.

加藤敏 (2010)「解題」『フロイト全集 19』岩波書店、355-384 頁.

下司晶 (2006)『〈精神分析の子ども〉の誕生—フロイト主義と教育言説—』東京大学出版会.
—— (2016 [初版 2007])「道徳性の発達理論とその臨界—フロイト, ピアジェ, コールバーグ—」井ノ口淳三編『道徳教育 改訂版』学文社、50-77 頁.

須川公央 (2006)「「事後教育 Nacherziehung」としての精神分析—フロイトにおける教育概念の二重性—」『近代教育フォーラム』第 15 号、191-195 頁.

立木康介 (2007)『精神分析と現実界—フロイト／ラカンの根本問題—』人文書院.

十川幸司 (2019)『フロイディアン・ステッパー分析家の誕生—』みすず書房.

藤山直樹 (2011)『精神分析という語らい』岩崎学術出版社.

Britzman, Deborah P. (2003) *After-Education: Anna Freud, Melanie Klein, and Psychoanalytic Histories of Learning*, State University of New York Press, Albany.

フロイト, アンナ (1985)『自我と防衛 [第 2 版]』外林大作訳、誠信書房.

松本卓也 (2018)『症例でわかる精神病理学』誠信書房.

ラブランシュ, ジャン・ポンタリス, ジャン＝ベルトラン (1977)『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房.

リクール, ポール (1982)『フロイトを読む—解釈学試論—』久米博訳、新曜社.

(日本学術振興会特別研究員 臨床教育学講座 博士後期課程 3 回生)
(受稿 2020 年 8 月 31 日、改稿 2020 年 11 月 10 日、受理 2020 年 12 月 7 日)

症例「鼠男」における自我変容としての道徳性

—S.フロイトが論じた二種類の「反動形成」—

後藤 悠帆

本稿の目的は、「道徳性」の発達を強迫神経症患者の「反動形成」に引きつけて論じたフロイトのテキストを検討して、超自我による強迫的な自我の支配とは異なる道徳性のあり方を明らかにすることである。第一に、超自我の理論に継承される、規範の内面化と抑圧の強化としてのフロイトの「道徳性」概念を確認する。第二に、症例「鼠男」を検討して、人の道徳的な性格への変容過程には、同一化と抑圧の機制とは別に二種類の「反動形成」が関与することを示す。

「自我変容」として自我の性格が形作られる「反動形成」と、良心による自己非難を強める「反動形成」である。第三に、この二種類の「反動形成」がフロイトの教育論と超自我論とともに引き継がれる過程を辿る。最後に、自我の変容に着目する「反動形成」が、自我が超自我から独立して強迫性から離れながら、無意識の欲望を統御する道徳的態度を示しうることを論証する。

Morality as Alteration of Ego in the Case “Rat Man”: Two Types of “Reaction-Formation” of S. Freud

GOTO Yuho

This paper considers S. Freud’s text arguing that the development of “morality” is similar to “reaction-formation” in patients with obsessional neurosis, and clarifies the morality that is different from the dominance of the ego by the compulsive superego. First, this paper confirms Freud’s concept of “morality” as the internalization of norms and the strengthening of repression, which is inherited in his theory of the superego. Second, it examines the case of “Rat Man” and shows that two types of reaction-formation, apart from the mechanism of identification and repression, contribute to the process by which a person transforms into a moral character. One type of reaction-formation is understood as “alteration of ego,” which shapes the character of the ego, and the other strengthens self-reproach by conscience. Third, this paper traces the process of these two types of reaction-formation inherited by both Freud’s theory of education and superego. Finally, it concludes that the reaction-formation, which focuses on the alteration of ego, can show a moral attitude that controls unconscious desires, while being independent from the superego and separating from compulsion.

キーワード：精神分析、超自我、強迫神経症、性格

Keywords: Psychoanalysis, Superego, Obsessional Neurosis, Character